



連載 剣道具の製造工程、すべて見せます

続・日本がつくる剣道具

第六回 面金が語る、世界五万組の真実

——日本、そして世界の剣道を支える「命の部位」——

構成／本誌編集部 写真提供／全日本武道具 協力／三栗野真也（全日本武道具センター）

■起源は語られず
■技は受け継がれる

面金の始まりには諸説あり、明確な原点はいまだ定かではない。だが印象的な証言が残っている。

戦前、大阪の橋本武道具で面金が製作されていた——そう語ったのは高井信昭氏である。氏が代表を務める高井面金は昭和28年創業。奇しくもそれは氏の生年と重なる。戦後復興と歩みをもたしてきた面金の歴史は、日本剣道の安全性を陰から支え続けてきた無言の系譜そのものと言えるだろう。

■面金とは何か

面金は単なる金属部品ではない。竹刀が真正面から打ち込まれる箇所であり、剣士の顔面を守る命の防壁である。

一本一本の鉄線の精度、わずかな角度の違い、許されない寸法誤差。そのすべてが安全性に直結する。防具のなかでもっとも高い精度と責任を求められる存在、それが面金である。そして特筆すべき事実がある。面金には事実上、海

外製が存在しない。現在も専門製造を続けているのは、高井面金、大阪面金、真和工業の3社のみだ。世界中で製造される剣道防具のほぼすべてに、日本製の面金を使用されている。誇張ではない。世界の剣道は、この3社に支えられていると言っても過言ではない。

■面金は「世界規模」を映す指標である

ここで重要なのは、面金が文化的存在であると同時に、世界の剣道規模を測る客観的な指標でもあるという点だ。面金の生産数は防具の生産数を映し、防具の



一本一本の鉄線が、剣士の命と安全を静かに、そして確実に守っている

生産数は剣道人口を映し出す。

2012年前後、武道必修化の影響により3社合計の生産は月産約2万個、年間約25万個に達した。日本の剣道界は活気に満ちていた。その後、必修化の特需が落ち着いた現在は月産約5千個、年間約5万〜6万個前後で推移している。

注目すべきは、この約10年間、生産数が大きく変動せず安定しているという事実である。それはすなわち、世界で製造される剣道防具の年間数量が一定規模を維持していることを意味している。

「世界年間5万組」は「衰退」か、「安定」か

コロナ禍で一時的に数量は落ち込んだが、コロナ前もコロナ後も、世界全体の年間防具生産数はおおよそ5万〜6万組で推移している。この数字は何を示しているのか。世界規模で見れば、剣道は決して衰退していないという事実である。

日本国内では人口減少が語られるが、海外では着実に広がりを見せている。ヨーロッパ、アジア、南米など各地で剣道は根付き、文化として定着しつつある。面金の数字は、その静かな現実を雄弁に物語っている。

本当に危機なのは何か

しかし本当に目を向けるべきは、需要の安定だけではない。もしこの3社が途絶えたとしたらどうなるのか。それは単なる部品不足ではなく、文化の土台そのものが揺らぐ事態を意味する。

面金だけではない。鹿革、芯材、なめし革、刺し糸など、防具は数多くの日本の職人技によって成り立っている。だが現場は今、高齢化、後継者不足、材料調達の困難という現実と直面している。

需要が安定している今こそ、技術継承という静かな

危機に目を向けなければならない。

剣道の未来は試合場だけじゃない

剣道人口を増やす努力はもちろん重要だ。しかし同時に、支える側にも光を当てる必要がある。

面金を曲げる手、寸法を見極める目、安全性を保証する責任。その仕事は決して表に出ることはないが、剣士の命は彼らによって守られている。剣道の未来は、熱気あふれる試合場だけにあるのではない。静かな製作現場のなかにも、確かに息づいている。

世界年間5万組。この数字を小さいと見るか、強いと見るか。安定している今こそ、技術を守り、育て、伝えていく責任がある。剣道の未来は「打つ者」と「守る者」の両輪によって成り立つ。

面金——それは日本剣道文化の象徴であり、世界をつなぐ無言の架け橋なのである。



文 案内人 かわべ たかひこ 川辺尚彦

(株) 日本剣道具製作所代表取締役
(株) 全日本武道具代表取締役

昭和55年熊本県多良木町に生まれる。
多良木高校卒業後、大学を中退して武道具業界に飛び込む。
25歳で独立し全日本武道具を創業、
平成26年日本剣道具製作所の経営も手がける。
平成29年自社海外工場を設立。
令和元年、内閣総理大臣安倍晋三より首相公邸へ招待を受ける。
市場80%以上の日本製剣道防具を製造。